

# 藤枝市教育委員会

令和7年12月定例会会議録

藤枝市教育委員会 令和7年12月定例会会議録

- 1 開催日 令和7年12月23日
- 2 場所 藤枝市役所西館5階 第2委員会室
- 3 会議に附した事項 (別紙のとおり)
- 4 出席委員  
教育長 中村 禎  
教育長職務代理者 永田 恵実子  
委員 福與 繁太郎  
委員 渡邊 博文  
委員 永田 奈央美
- 5 出席した事務局職員  
教育部長 増井 孝典  
教育政策課長 金原 雅之  
学校教育監 三須 貞佳  
主席指導主事 道越 洋美  
生涯学習課長 小西 ゆう子  
学校給食課長 村松 雅弘  
図書課長 杉本 守  
総務係長 目崎 真吾

# 教育委員会 令和7年12月定例会

日 時 令和7年12月23日 午後2時  
場 所 藤枝市役所西館5階 第2委員会室

1 開 会 午後2時

2 会議録署名委員氏名 福與繁太郎委員、渡邊博文委員

3 日程第1 諸般の報告

教育部長 市議会11月定例会月議会質疑応答要旨

学校教育監 藤枝市立小中学校／令和8年度入学式ほか日程について  
藤枝市教育研究作品の募集について  
「小さな物語」（授業で人を育てる）実践事例の募集について

学校給食課長 物価高騰に伴う学校給食の対応について  
藤枝市立新学校給食センター整備事業スケジュールについて

生涯学習課長 令和8年1月の『はたちの集い』の開催について

4 閉 会 午後3時

日程第 1 諸般の報告

市議会 1 1 月定例月議会質疑応答要旨

渡邊委員	市街地小学校におけるチーム担任制の充実については、非常に意義のある取組だと感じた。特定の担任を設けず、チームで担任を担う体制があるが、具体的には、1 週間から 2 週間程度で担任が次々と交代する仕組みで運用しているのか。
学校教育監	チーム担任制の運用方法については、各々若干の違いがある。例えば、2 クラスを 2 人の担任が 1 週間から 2 週間程度で交代しながら担当する場合や、別の学年では、3 人の担任で 2 クラスをローテーションして受け持つ運用も行っている。いずれも、学年に所属する教職員がチームとして関わり、学年内でクラスを順に担当していくような体制となっている。
渡邊委員	概ね良好に運用されており、子どもたちからも理解や賛同を得られているということだと受け取った。
学校教育監	ここに記載しているとおり、取組自体は概ね支障なく進められている。一方で、担任が変わることで、いろいろな先生と関わられることを喜ぶ子どもがいる反面、担当が変わることに不安を感じる子どもがいることも事実である。
永田恵実子委員	資料 4 の「小さな物語」がとても印象的だと感じたのは、教員の子どもの見るまなざしが文章とそのまま結びつき、記述そのものが授業改善につながっている点である。10 ページにある A くん の事例では、発達の可能性や人とのふれあいという視点から子どもの姿が捉えられており、通常学級に在籍しながら授業についていくことが難しいのではないかと感じる。その子の居場所づくりにつながっていることが読み取れる。普段はあまり意欲が見られなかった A くんに対して、「目指せ泥団子はかせ」という単元を設定したことも印象的である。サラ粉を使って時間をかけて泥団子をつくり、磨き上げるという工程を A くんがよく理解しており、完成した泥団子を見て周囲から「すごい」「ピカピカだ」と声をかけられる場面は、教員が「認められる経験」を意図的につくろうとしていたことが伝わってくる。A くん自身にとっても、好きなことに集中し、継続して取り組み、完成させることで達成感を得られ、さらに仲間から認められることで自己肯定感が高まっていく様子が、この記述から十分に読み取れる。非常に素晴らしい実践だと感じた。その上で、今後さらに、子どもへの関わり方について「ここを工夫するとよい」といった改善の視点が加わると、より深まりのある内容になるのではないかとも思った。発達にゆっくりさがある子の中で、特定の力や強みを丁寧に見つけ出し、それを生かしていく点に、この教師の良さが表れているように感じ

る。この考え方は特定の事例にとどまらず、どの学校、どの子どもにも通じるユニバーサルな視点であり、「できないこと」ではなく「できること」に目を向け、集団の中で価値づける実践が、丁寧に書かれている点で、とても意義のある取組だと思った。こうした点について、ぜひ話を聞いてみたい。

学校教育監

狙いとしては、まさにご指摘いただいた点を意図している。例えば10ページのAくんについても、教員は発達の可能性や人とのふれあいという視点でその姿を見取っているが、見方を変えれば、自己決定の表れと捉えることもできるし、友達や相手との関わりという視点で捉えることもできる。捉え方は一つではなく、さまざまな見方があり得るが、何よりも大切にしたいのは、日常の学校生活を注意深く見る視点を磨いていってほしいという点である。

この事例を他の教員が読むことで、「そういう見方もできるのか」と気づき、自分自身の感性を磨くきっかけとして活用してもらえればと考えている。また、この取組は今年で2回目となるため、今後もより良いものとなるよう、内容について引き続き検討していきたい。

永田恵実子委員

子どもの声があって、それが自然に表に出てくるものを受け止める、という視点があると捉えてよいのではないかと思った。他の事例では子どもの声あまり入っていないため、何か工夫があるとよいと感じた。やはり生の声が入ることで、読み手にとっても状況や意味をより受け取りやすくなるのではないかと思う。

保育の現場では、数値や結果だけでなく、日々のエピソードを通して、発達がまだ未熟な子どもを理解していくことが大切にされている。そうした視点で子どもを見ていくことは、児童に対しても同様に重要だと感じる。子どもの声や姿が具体的に示されることで、教師が日頃どのようなまなざしで子どもを見ているのかが、より伝わってくるのではないかと思った。

福興委員

4ページの「戦没者慰霊碑について」という質問を読んで感じたことがある。平和の大切さを学ぶことや、戦争の記憶を継承していくことが本来の目的であり、慰霊碑の見学はそのための一つの手段だと考えれば、教材として取り上げる材料は必ずしも慰霊碑に限らなくてもよいのではないかと思う。少し昔の話になるが、今から10年ほど前、子どもが「近くの畑でこんなものを拾ってきた」と言って、銃弾を持ってきたことがあった。最初は何か分からなかったが、調べていくうちにB29の機関銃弾であることが分かった。場所は学校の裏山付近で、さらに資料を調べると、1945年4月に藤枝上空で日本の戦闘機とB29が交戦し、戦闘機が山に墜落したという記録があり、その際の弾ではないかということが分かってきた。

その経緯を整理し、2学期の終業式で子どもたちに話をしたところ、1年生にも関心を持って聞いてもらうことができた。この経験から、戦争にまつわる記憶や物、記録といったものは、市内の身近な場所にも数多く存在しており、慰霊碑もその一つとして活用できるのだと感じた。

学校では多くの取組を同時に進める必要があり、これだけを単独で扱うことは難しい面もある。しかし、日常の中で、戦争に関わる材料やエピソードが身近にないかという視点を、教員や校長、教頭が常に持つておくことは大切だと感じる。

教育部長

今回の内容は、議員の質問のうち、一部を抜粋したものになっており、この質問の趣旨は、市内各地域に多く存在する慰霊碑について、近年、その設置場所や管理の面で課題が生じてきているという点があった。そうした状況を踏まえ、各地域には慰霊碑をはじめとする、戦争に関わるさまざまな題材が存在していることを改めて伝え、子どもたちにも知ってもらいたいという思いで、この質問を受け止めたところである。こちらとしても、慰霊碑だけを戦争学習の題材として捉えているわけではなく、あくまで学習を進める上での一つの素材、手段の一つとして位置付けている。ご指摘のとおり、実際の学校現場では、戦争をテーマに学習する際、慰霊碑以外の資料や事例も取り上げながら進めていると考えており、その中の一つとして慰霊碑がある、という認識である。

永田恵実子委員

14 ページに記載されている小中学校における暴力行為について、まず、同一の児童生徒が複数件の行為を起こしているケースが含まれているのかという点を確認したい。

暴力行為の背景には、人間関係のトラブルや、自分の気持ちを言葉で表現することが苦手であること、発達上の課題、家庭環境など、さまざまな要因が考えられ、必ずしも本人だけの問題とは言えないと感じている。そうした兆しに早い段階で気づくことが重要だと思うが、そのような視点を踏まえた対応や支援が、実際に行われているのかについて伺いたい。

学校教育監

まず、この数値については人数ではなく「件数」を示しているため、同一の児童生徒が複数件の行為を起こしている場合も含まれている。

暴力行為については、非行などの生徒指導上の問題に限らず、その背景は非常に多様であり、当該児童生徒本人だけの問題とは言えない。家庭環境の影響や、発達特性に起因するケースも見られる。そのため、暴力行為が起きた際には、行為そのものに対しては適切に指導を行う一方で、同時に背景にある要因を丁寧に把握し、必要な支援につなげていくことを学校として心がけている。

また、支援員の配置なども含め、短期的な対応だけでなく、長期的な視点で見守り、関わっていくことが重要だと考えている。

閉 会

午後 3 時